

6 アンケート調査分析

平成30年11月1日（木）町民アンケート調査結果の分析

講師 兵庫教育大学 日渡 円 教授

広尾町の分析結果

学校と地域の関係性モデルによる地域住民と教職員の意識(2018)

分析:兵庫教育大学 スクールコミュニティ研究チーム



分析結果の見方

- アンケート項目を「学校と地域の関係性モデル」の要素ごとに整理した。
- 要素ごとの比較を、住民と教職員で比較し、「意識の違い」を明らかにした。
- 上の分析で、特に問題と思われる点について、項目ごとの比較などを通じて、より詳細に分析した。
- 広尾町の住民および教職員の意識を、より客観的に分析するため、過去の調査結果(2016実施の他府県の結果)と比較した。

住民と教職員の意識差の結果から(1)

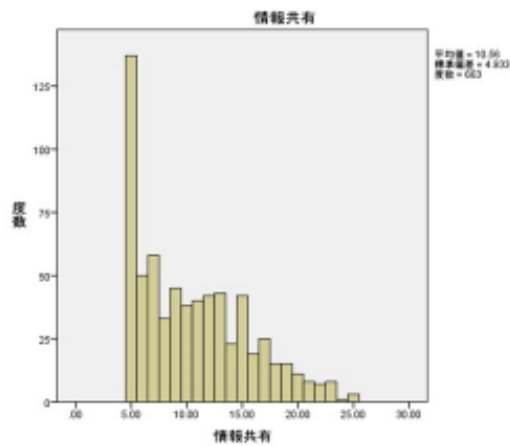
関係形成期の要素における違い

- 関係形成期の要素において、住民と教職員の意識差が統計的に有意に認められた。
- 特に、**情報共有における差が大きい。**
- 住民は、学校の情報を得ていない(知っていない)状態が顕著。
- 特に「学校が今取り組んでいる活動」や「学校が抱えている課題や、今何に困っているか」について知らない住民が多く、**学校との情報共有がなされていない。**
- また「学校評価」があることを「知らない」と答えた住民は45%にのぼり、**学校の情報発信のあり方が問われる。**
- 一方、教職員は、地域の情報がある程度、得ている・知っているとする回答が多い。

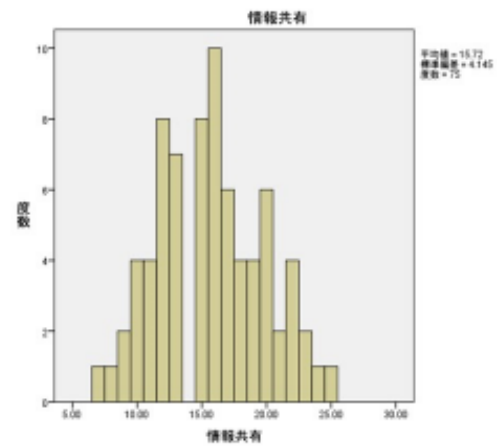
地域住民と教職員の意識差(1)

	関係性モデルの要素		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
関係形成期	地域の中の学校重視	地域住民	670	11.3224	2.10571	.449	.654
		教職員	75	11.2267	1.70511		
	地域の積極的関与	地域住民	667	8.3163	2.94092	-2.695	.008
		教職員	74	9.0946	2.28257		
	情報共有	地域住民	663	10.5641	4.93294	-8.709	.000
		教職員	75	15.7200	4.14455		
	学校地域活動	地域住民	647	14.3725	4.92439	-5.266	.000
		教職員	75	16.9733	3.93520		

情報共有に大きなずれ

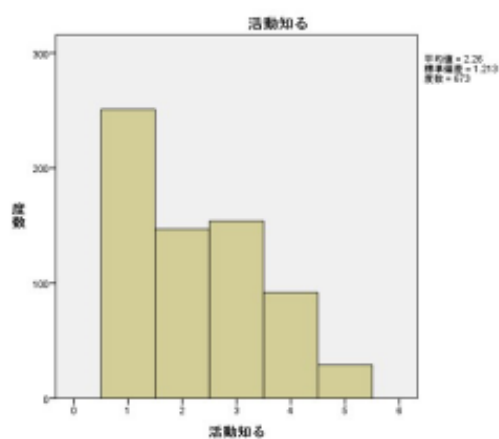


住民

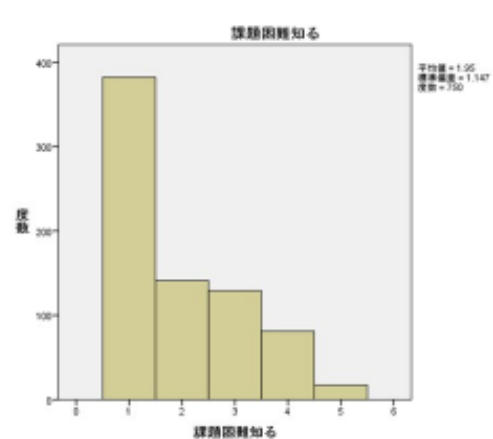


教職員

住民は学校の情報を得ていない

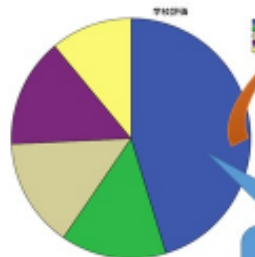


知らない ←→ 知っている

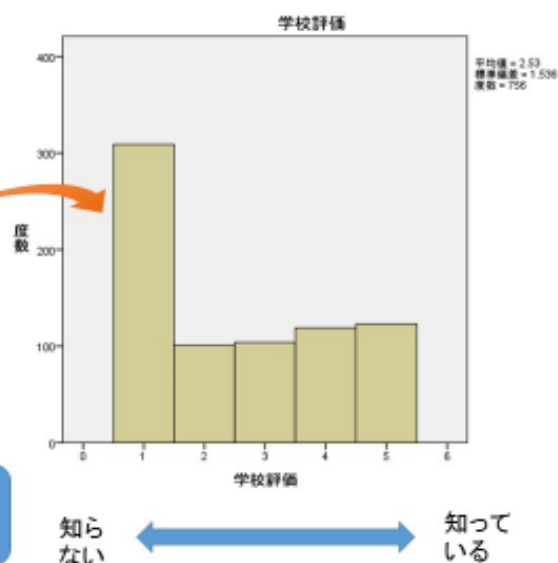


知らない ←→ 知っている

学校評価があることも
多くの住民に知られていない



45%の住民が、
知らないと回答



住民と教職員の意識差の結果から(2)

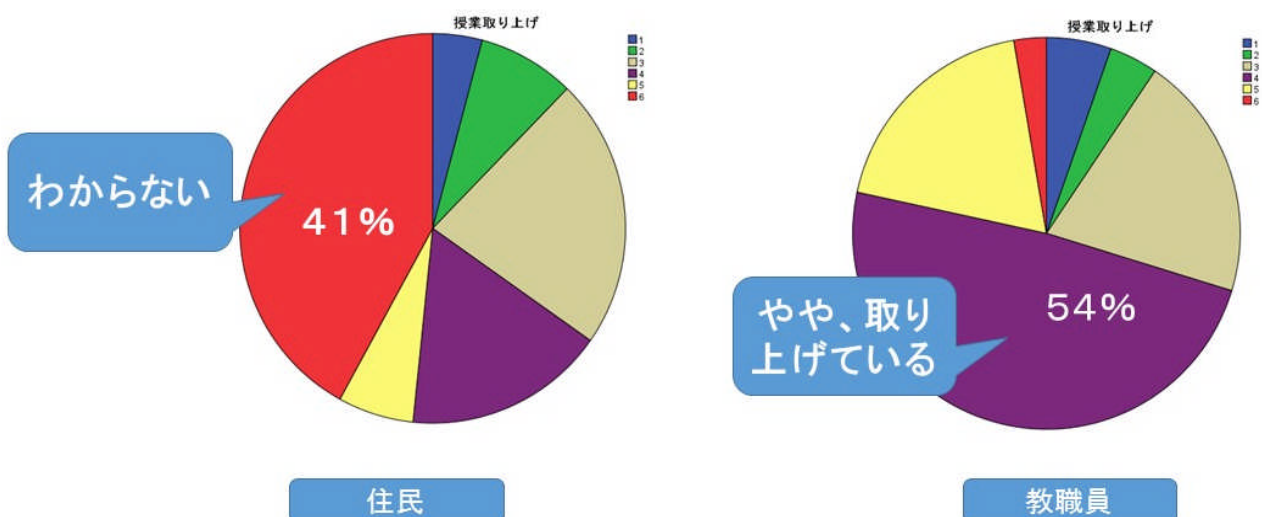
共同運営期の要素における違い

- 共同運営期の要素では、教育課程協働を除いて、統計的な有意差は見られなかった。
- 学校で地域を取り上げる授業や学習が行われているかの認識において、教職員と住民のあいだにずれが見られた。
- **ここでも、住民が学校の情報を得ていない状態が、明らかになった。**
- 地域を取り上げた授業や学習、地域をまなぶ素材や人材の活用がなされているかの各項目について、**40から50%の住民が「わからない」と回答。**
- また「地域の求める子ども像の反映」については、住民の48%、**教職員の22%が、「わからない」と答えていた。**
- この結果は、「**地域の求める子ども像**」そのものの共有がなされていないことをも意味するといえる。

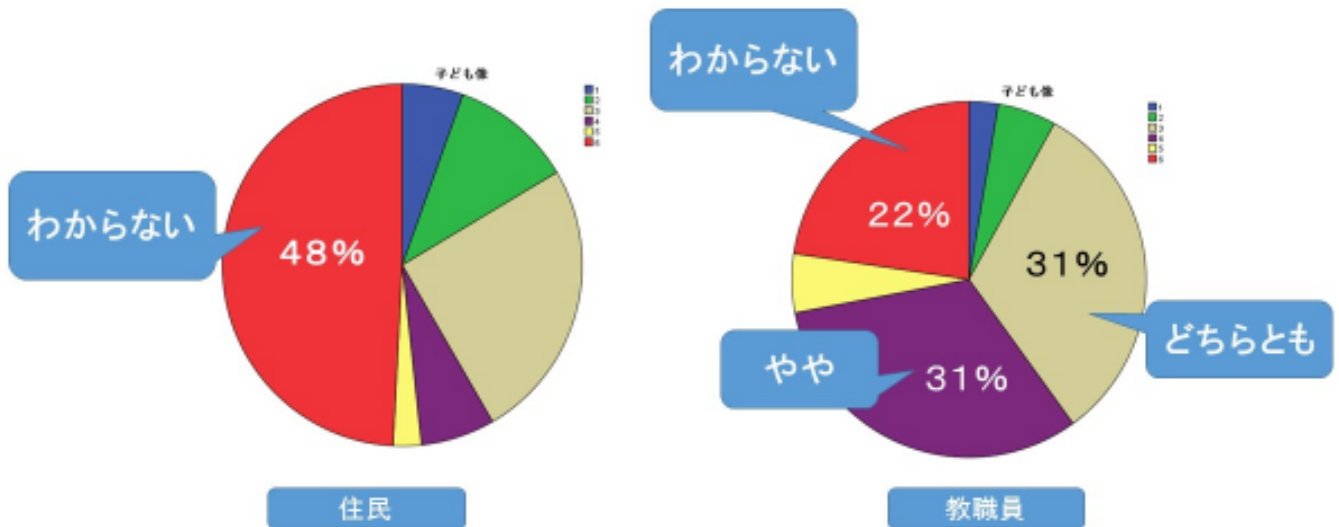
地域住民と教職員の意識差(2)

	関係性モデルの要素		N	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
共同運営期	教育課程協働	地域住民	241	25.1826	5.60058	-4.080	.000
		教職員	48	28.2292	4.52999		
	地域に開かれた組織体制	地域住民	216	14.4907	4.36262	-.029	.977
		教職員	51	14.5098	3.80722		
	学校地域信頼	地域住民	668	10.8997	2.81469	.131	.895
		教職員	76	10.8553	2.58046		
	CS制度への態度	地域住民	658	13.4544	4.53687	.451	.652
		教職員	74	13.2027	4.67866		

学校の授業で、地域が取り上げられているか



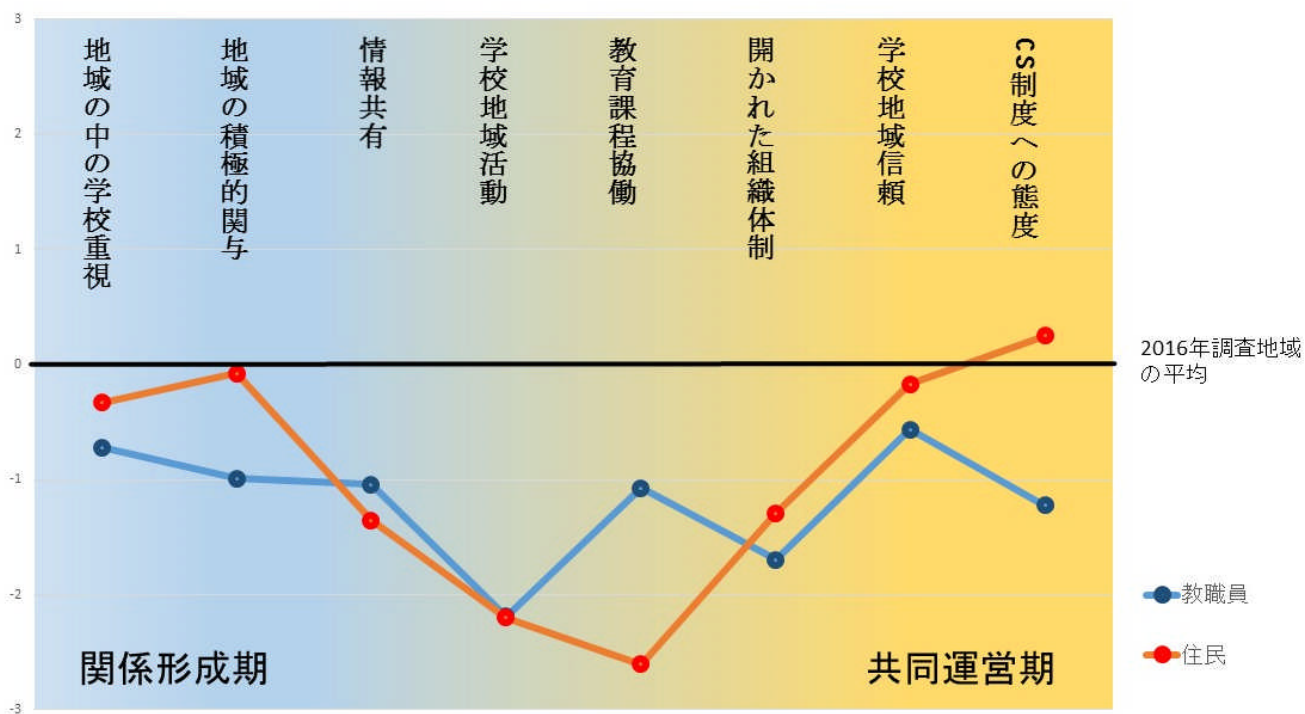
地域の育てたい子ども像が、学校の授業に反映されているか



広尾町と他地域との比較

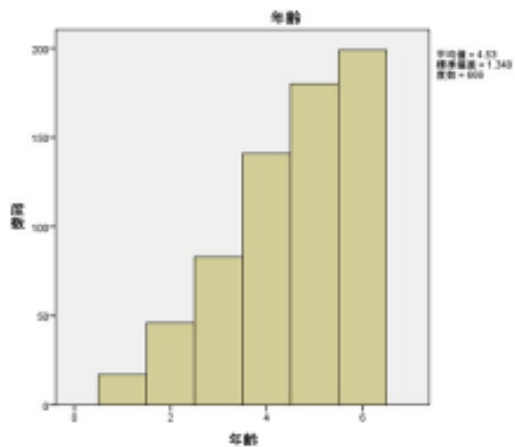
- グラフの基準線(黒)が、2016年調査地域の結果。
- 赤線は、広尾町住民の平均値が、他地域の住民の平均値からずれている様相を示す。同様に、青線は、広尾町の教職員の平均値が、他地域の教職員の平均値からずれている様相を示す。
- いずれも、ほとんどの要素で基準線を下回っていた。
- 特に、情報共有、学校地域活動、教育課程協働における低さが、住民・教職員ともに顕著。
- これらの要素が他地域を大きく下回った理由は、住民回答者の年齢分布による部分も大きいと考えられる。
- 一方、教職員の大幅な下回りは、年齢等の影響は考えにくく、今後の学校のあり方に一石を投じうるものと考えられる。

広尾町 他地域との比較



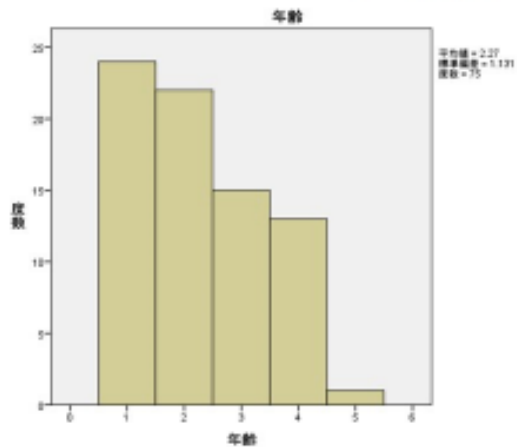
回答者の年齢分布

住民



29歳以下 ← 70歳以上

教職員



29歳以下 ← 70歳以上

【参考】学校と地域の関係性モデル（5段階）と時期

4-1. 学校と地域の関係性モデルにおける時期

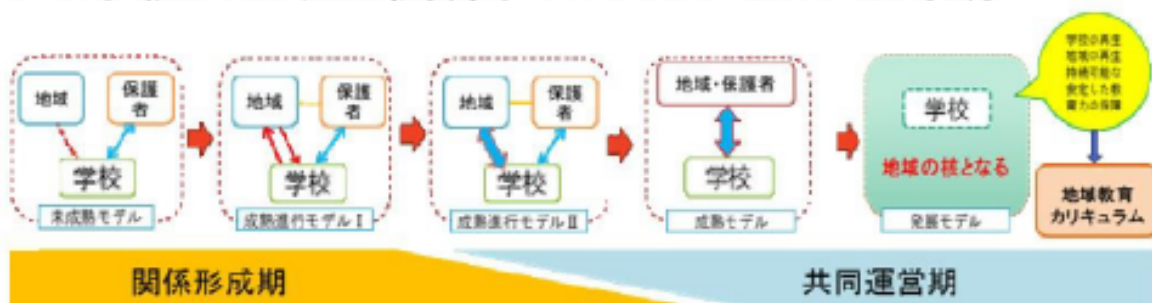


図3 関係形成期と共同運営期 (SC協議会2014, p.12)

- ・関係形成期: 関係をつくる段階＝学校、保護者、地域が「互いに相手を認めて関係をつくる」
- ・共同運営期: 学校を含めた地域全体をステークホルダーが共同で運営する段階＝相互信頼を基盤

4-4. 関係形成期3要素の循環過程



日渡教授は「広尾町は『関係形成期』の『未成熟モデル』から次の段階に移行し始めた段階であるとし、情報共有の必要性を指摘しました。
(平成30年度町民説明会)

図5 関係形成期3要素の循環過程 (SC協議会2014, p.15)

- ・循環＝関係成熟をスパイラル(螺旋)状に深化させること
- 例: 情報開示の開始→情報入手への意欲→関心や開示に対する正の応答→情報共有の程度への正の効果→補完的個別的協力・協働開始への機会創出(開始しやすい)、など

7 説明「広尾町におけるCS制度」

平成30年11月26日 広尾町全教職員への説明

1. 制度の趣旨について

CSは学校・地域・家庭が一体となって、子どもの育成に取り組めるようにするもの。

- ① 協議会は学校の支援に関して協議する機関である。
- ② 協議会は「承認」、「意見の申し出」、「評価」を通して学校運営に参加する。
- ③ 協議会は情報提供を通して、学校運営への支援・協力を促進する。

学校は、毎年、教育課程を編成し、その条件整備として学校経営計画を立て、教育活動を行い適切な時期に学校評価を行う。

学校運営協議会の日程・内容は学校のPDCAに対応して、「教育課程・学校経営方針の承認」と「学校運営の評価」を行うように設計している。

2. 学校運営協議会の日程と内容について

(ア) 第1回学校運営協議会

第1回目は1月に実施し、CSの設置や、趣旨等について説明し、「地域の目指す子ども像」をテーマに「熟議」を行う。

具体的には「広尾小の子ども像」「豊似小の子ども像」「広尾中の子ども像」である。

この熟議を受け、校長先生には、次年度の重点教育目標と実現の方策を次の協議会に提出していただくことになる。重点教育目標は教育課程そのものであり、最も基本となる要素になる。

(イ) 第2回学校運営協議会

第2回協議会の開催時期は平成31年2月～3月で、議事は「教育課程の承認」である。

通常、学校では、教育目標を実現するために、相応しい指導内容を定め授業改善へと具体化していくが、この段階は先生方の一致協力した取組が必要なところ。

具体化した方策(カリキュラム)の承認を得た上で新学期をスタートするのが理想だが、現在の各学校の暦では、3月にすべてを協議会に提出することは難しいと思われる。

そこで、本年度第2回協議会で示す教育課程の範囲等に関しては、校長先生に検討していただくようお願いしている。

いずれにしても、校長先生からは重点教育目標の他に具体化の拠り所となるものも示していただけたと思うので、先生方には具体化への作業に、一致協力して取り組んでいただきたい。

(ウ) 第3回学校運営協議会

第3回の協議会の議事は平成31年4月～5月頃になる。議事は「学校経営計画の承認」で、承認が必要な教育課程に関わる内容があれば示してもらうことになる。

(エ) 第4回学校運営協議会

第4回の協議会では、継続してきた熟議をもとに、地域側の取組を具体的に決定する。

(オ) 第5回学校運営協議会

第5回の開催時期は1月で、学校の自己評価結果を協議会に示していただく。協議会では「学校関係者評価」を行う。

毎年、第2回から第5回の内容を繰り返す。

3. 地域や家庭の側からの支援（協働）

(ア) 支援の方向

校長先生が示す重点教育目標は、地域や家庭の側にとっても重要な意味をもつ。

協議会においても学校と共有した重点教育目標を実現するための方策を話し合う。

(イ) 広尾っ子応援団

重点教育目標の実現に取り組む先生方を支援するため「広尾っ子応援団」を組織する。登録要件は3つである。

一つは学校運営協議会に関する情報の確実な情報の受け取り手になってもらうこと。

二つ目は地域の素材や人材について学校へ情報提供できる方や地域学校協働活動に可能な範囲で協力できる方である。

先生方が教材研究の中で「地域の情報が欲しい」と発信したら、「それ知っている」「それ提供できる」と返ってくるという関係をつくりたい。

(ウ) 応援メッセージ

3つ目は、「応援メッセージ」を年1回以上届けることができる方である。

「広尾の子どもたちには、自分のよさに気付いて自信をもってほしい。そして、温かい『まなざし』をもった大人がこの町には一杯いることも知って、広尾町を好きになってもらいたい。」という願いを込めている。

先生方にはメッセージの内容を掲示したり、朝や帰りの会などで子どもたちに伝えたりして協力していただきたい。

学校・家庭・地域が一体となって広尾町の子どもたちを育てる環境をつくり、先生方、保護者、地域住民、そして子ども自身が成長の喜びを味わえるようにしたい。

8 説明「広尾っ子応援団登録制度の趣旨・背景について」

平成 30 年 11 月 28 日 十勝青少年育成推進指導員研修会における説明

1 広尾町の新たな取組

① 広尾っ子応援団登録制度

広尾っ子応援団の登録要件は3つです。はじめの2つの登録要件が意味するところをお話しします。

学校の先生方の重要な仕事に教材研究があります。教科書以外のものも使って、よりよい授業、例えばよくわかる授業や主体的に取り組む授業などを行おうと色々な準備をします。これが教材研究です。教材研究をしている中で「地域の情報が欲し

い！」と応援団に向かって発信したら、「それ知っているよ！」「それもっているよ！」と返ってくるパイプをつくりたいと考えています。

次に、「地域学校協働活動」という言葉を説明します。

学校がコミュニティ・スクールになると、学校と地域が共通の目標をもちます。

学校は授業という形で目標を実現しますが、地域や家庭もまた、その目標実現に向けた方策を考え実行することが期待されます。その地域や家庭の取組のことを地域学校協働活動と言います。この活動に「自分の生きがいや生涯学習になるかも知れない。」と思うものがあたら参加してくださいということです。

広尾っ子応援団登録制度とは

【登録要件】

- 応援団からの情報を受けることができる方
- 授業づくりに関する地域の素材や人材についての学校への情報提供や地域学校協働活動に可能な範囲で協力できる方（任意）
- 「応援メッセージ」を年1回以上届けることができる方（必須）

「応援メッセージ」を、多くの町民が参加する息の長い地域活動にするとともに、広尾町のCSを地域全体で支えます。

② 応援メッセージ

3つ目の登録要件は、「応援メッセージ」を年1回以上届けることができる方です。

応援メッセージ活動とは、「誇らしく思ったり、感心したりなど、心に残った広尾っ子の言動や活躍の感想など」を応援団事務局（教育委員会CSコーディネーター）に届けることです。事務局の私は、そのメッセージを学校に届けます。

目指すところは、「子どもたちに自己肯定感をはぐくむとともに、広尾町を町民の温かなまなざしに包まれた、広尾っ子の心の居場所とすること」です。

「子どもたちには、自分のよいところに気付いて、自信をもって色々なことに挑戦してほしい。そして、自分が育ったこの町には温かい『まなざし』をもった大人たちが一杯いることを知って、この町を好きになってもらいたい」ということです。

先生方には、届いたメッセージを子どもたちに伝えてもらうよう、既にお願ひしてあります。

メッセージをもらった時の子どもたちの様子を思い浮かべながら、町民の方にも楽しみながら参加してほしいと思います。

応援メッセージとは

- 誇らしく思ったり、感心したりなど、心に残った広尾っ子の言動や活躍などについて感想を交え窓口（CSコーディネーター）に届けてください。
- CSコーディネーターは受け取ったメッセージを学校に届けます。

子どもたちに自己肯定感をはぐくむとともに、広尾町を町民の温かな「まなざし」に包まれた、広尾っ子の心の居場所とすることを目指します。

2 応援メッセージの背景

① 広尾っ子の長所

「応援メッセージ」の取組をはじめようとした背景を3つお話しします。

まず「広尾っ子の長所」です。

昨年、11月29日、広尾町のCS制度導入のために熟議が行われました。テーマは「広尾の子どもたちの長所、短所」です。教職員、地域の方々合せて60名くらいの方が話し合いに参加しました。

これは、その長所についてまとめたものです。真ん中の列は、地域の方も教職員も共通だったところ

です。

「挨拶ができる」「少年団、部活動を頑張っている」「仕事や役割を一生懸命する」等々、子どもたちのよさを広尾の大人はたくさん知っています。

朝、小学生や中学生と出会います。「おはよう」と声をかけると、「おはようございます」とごく自然に返ってきます。学校が荒れた時代を知っている人にとっては、「挨拶ができる」ことはあたりまえのことではありません。

背景の1つ目は「広尾の子どもたちにはよいところがたくさんあり、それを知っている大人もたくさんいる。」です。

応援メッセージの背景①

第1回CS熟議より
【広尾っ子の長所】

地域住民

- 小中高で連携が取れている
- 町内の子どもの悪い噂を聞いたことがない
- 授業態度がしっかりできている
- 交通ルールを守ることが出来る

地域住民・教職員

- 挨拶ができる
- 少年団、部活動を頑張っている
- 仕事や役割を一生懸命する
- 自分の好きなことは頑張る
- 素直、明るく元気、優しい
- 体を動かすのが好きだ
- 他学年とも仲が良い
- 子どもらしい

教職員

- 自分たちで考えて行動ができる
- 外で遊ぶことができる
- 親とよく話す
- 時間を守って行動ができる
- お年寄りに優しい
- お互いに教え合う、協力する

② 広尾っ子の自己肯定感

次は、広尾っ子の自己肯定感の実態です。

全国学力学習状況調査の中に、「自分には、よいところがあると思いますか？」という質問があります。この質問項目と他の質問項目や学力調査の結果に相関があるということがわかっています。

例えば、「自分にはよいところがある」と感じている子どもは「将来の夢や目標をもっていますか？」という質問に、「そう思う、どちらかとそう思う」と答える傾向にあります。また、学力についても高い傾向にあります。

そこで、広尾町の子どもたちの自己肯定感の実態です。全国・全道と比較しても肯定的な回答が低くなっています。

「熟議」であれほどたくさん挙げられた広尾っ子の長所ですが、「残念ながら、『自分にはよいところがある』とはっきり言える子が多いとは言えません。」これが2つ目の背景です。

応援メッセージの背景②

全国学力学習状況調査
【広尾っ子の自己肯定感】

小学校

質問番号	質問事項										
(1)	自分には、よいところがあると思いますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
広尾町教育委員会	26.5	51.0	18.4	4.1						0.0	0.0
北海道（公立）	38.7	44.0	12.5	4.6						0.0	0.0
全国（公立）	41.2	42.8	11.6	4.3						0.1	0.0

応援メッセージの背景②

全国学力学習状況調査
【広尾っ子の自己肯定感】

中学校

質問番号	質問事項											中学校	
(1)	自分には、よいところがあると思いますか												
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答	
広尾町教育委員会	37.7	34.0	17.0	11.3							0.0	0.0	
北海道（公立）	34.4	43.8	15.7	6.1							0.0	0.0	
全国（公立）	33.7	45.1	15.2	6.0							0.0	0.0	

③ 広尾町コミュニティ・スクール元年

背景の3つ目は1月からのCSの導入です。

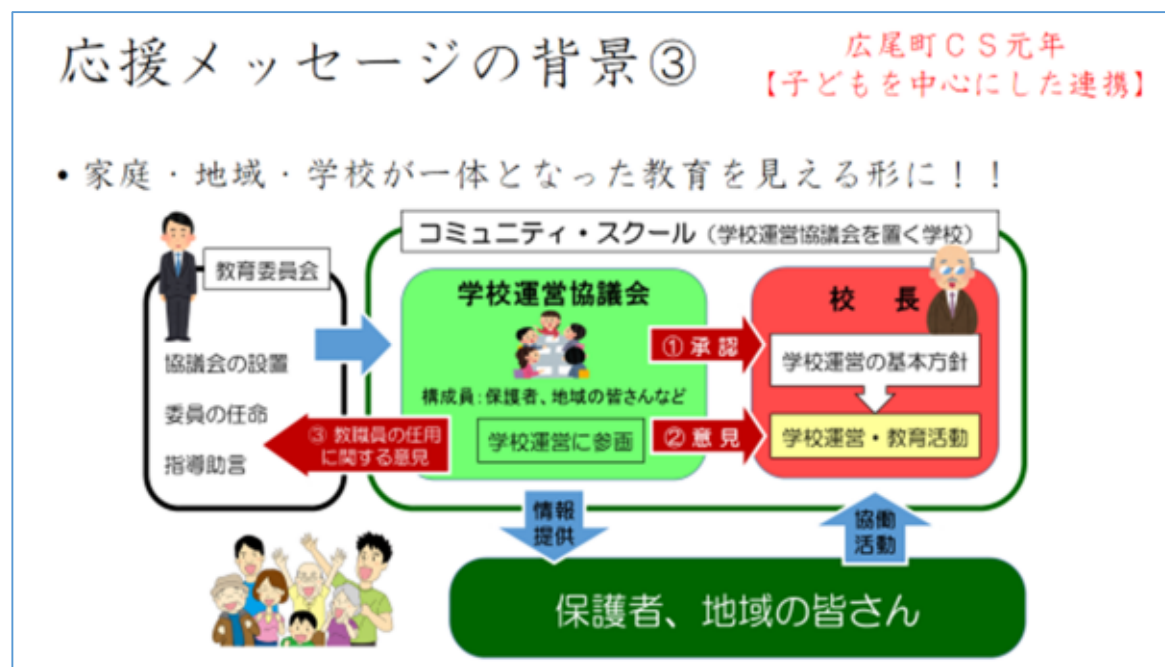
広尾町教育委員会は、「学校と、地域・家庭が目標を共有して、同じ方向を向いて、協働するのがCS制度です」と、何度も町民の方々にその趣旨を説明しています。

教育分野では、しばしば「家庭・地域と一体となった教育」というフレーズが登場します。特に「心の教育」を話し合う場では必ず使われます。このフレーズが多用されるのは、それぞれ単独でばらばらに頑張ったってうまくいかない、一緒にやらなければいけないと考えられるからです。

CSは学校運営協議会をつくれば制度としては完成です。

時々、組織ができたなら何となく解決策が見つかった様な気になってそこで一息ついてしまうことがあります。でも、大切なことはその組織や制度を子どもの成長に生かすことです。目の前の子どもを真ん中において、学校・地域・家庭が何をすべきか分かり合えなければ進みません。同じ土俵が必要です。

「CSの導入によって学校と地域と家庭が同じ土俵に立つチャンスが生まれた。」これが、3つ目の背景です。



3 大人の役割

① 体験と体験活動

子どもの成長に「体験は大事だ」ということに異論をはさむ人はいません。ただ、体験と体験活動は全く違うものだということに気を付けたいと思います。

大人が計画する体験活動は「ねらいや内容」のことです。しかし、体験は参加した子どもたち一人一人の内面につくられるもので、私たちは本人の口から語られて初めてその子が体験したことを知ることになります。

体験活動を計画した大人は「きっと驚くだろう」「興味をもつだろう」「心に残るだろう」と思っている、実際にはそうでないことはよくあります。でも、参加した子どもたちは大人の意図と違うところで心に残る体験しているかもしれません。

だから、活動の参加者で感じたことを伝え合うことには大きな意味があります。「自分は感じられなかったことが友達には感じられた」という気づきが新たな学びのスタートになります。

体験と振り返り（内省）の往還によって子どもの心は育っていきます。

体験と体験活動の違い

- 体験活動はあらかじめ予定された「ねらい」や「内容」
- 体験は個人の「思い」として語られるもの

体験活動は計画できても体験は計画できない

他者の存在がなければ心を耕す体験になり難い

② 応援メッセージに込めた願い

「心の教育」は子どもたちの内面に価値的なものの見方や考え方を育てることです。

価値とは、思いやりや優しさ、強い意志、命を大切にする気持ち、郷土愛などの心情や思い、ひと言で言うなら「人間としてのよさ」です。そうした「よさ」が自分にもあると自覚できた時、自己肯定感は高まります。

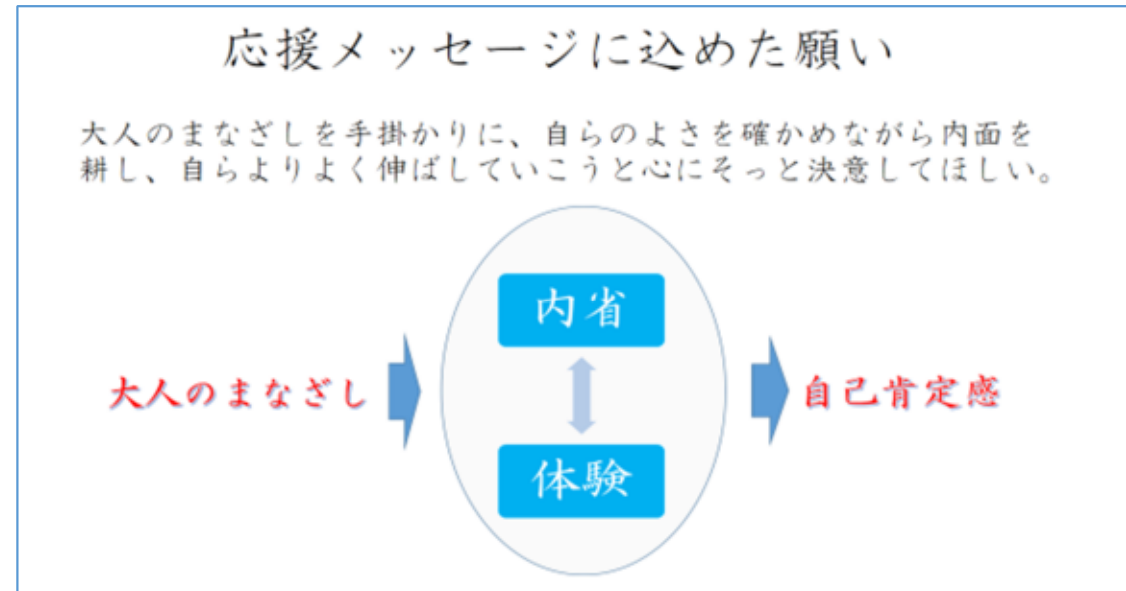
でも、ヤル気が見られないからといって、いきなり「羽生結弦や錦織圭のような強い意志をもて！」言われても、私が思春期の子どもなら「むり」と言い返すでしょう。

はじめから「強い意志」と言えるものを持っている子どもなんかいません。でも、いずれそうなる芽はもっています。それを子どもたちが自覚し、自ら育てようとする。それ以外に心を育てる方法はありません。

「あの人たちほどではないかもしれないが、君たちの中にも、いずれ彼らと同じものに育っていく芽がある。その芽を一緒に探そう。」と、多くの大人にかかわってもらえるようにするのが「応援メッセージ」です。

「大人のまなざしを手掛かりに、自分の『よさ』の芽に気づき、それを自分で大きく育ててほしい。」

この取組にそんな願いを込めています。



広尾町コミュニティ・スクール推進委員会委員名簿（敬称略）

【平成30年度】

広尾町立広尾中学校長（委員長）	加藤 健一
広尾町立広尾小学校長	高橋 敏宏
広尾町立豊似小学校長	秦 公一
北海道広尾高等学校長	皆添 英二
広尾町教育委員会管理課長	山岸 直宏
広尾町教育委員会社会教育課長	早川 修
広尾町教育委員会管理課学校教育係長	小澤 達也
広尾町教育委員会社会教育課社会教育係長	須田 圭一
広尾町教育委員会社会教育課CSコーディネーター	寺田 弘文

【令和元年度】

広尾町立広尾小学校長（委員長）	高橋 敏宏
広尾町立広尾中学校長	松橋 達美
広尾町立豊似小学校長	野田 淳
北海道広尾高等学校長	皆添 英二
広尾町教育委員会管理課長	山岸 直宏
広尾町教育委員会社会教育課長	小川 浩司
広尾町教育委員会管理課学校教育係長	小澤 達也
広尾町教育委員会社会教育課社会教育係長	須田 圭一
広尾町教育委員会社会教育課CSコーディネーター	寺田 弘文